

【日本側コーディネーター及び拠点機関名】

日本側拠点機関名	早稲田大学
日本側コーディネーター所属・氏名	早稲田大学理工学術院・中川武
研究交流課題名	メコン川流域国における文化遺産の保存活用学の形成
相手国及び拠点機関名	カンボジア : プノンペン王立芸術大学 ベトナム : フェ大学 ラオス : ラオス国立大学 タイ : シラパコーン大学 ミャンマー : 文化省

研究交流計画の目標・概要

【研究交流目標】

ユネスコ世界遺産には現在約 900 件のサイトが記載されている。185 ヶ国にのぼる条約締結国数からも、最も成功した世界条約の一つといわれ、登録を目指す動きは加熱の一方で、アジア・アフリカ等の途上国や新しい考え方による遺産の記載は増加が予想されている。記載実現のためには、その固有の価値とともに、顕著な普遍的価値の証明や保護体制の構築が必要であり、また記載を目指す運動自体が、必然的に地球的拡がりや人類史的な長期的視点からの遺産と地域の結びつきを見つめ直すきっかけとなる。記載後も遺産の保存活用のための人材育成が必要であり、多角的な国際協力体制の実現が求められている。環境・災害・食糧・資源・格差・紛争等の 21 世紀的世界の危機の深刻化の中で、遺産研究が地域や国の歴史文化の理解にとって不可欠であり、その保存・再生が疲弊した社会の復興の礎となり、人々の精神的一体性の源泉である公共空間回復に寄与すること、そして保護のための国際協調活動が、国際交流と平和構築に大きな役割を果たすことの期待がその背景にある。申請者らはこれまでにカンボジアやベトナムを中心として調査研究・保存・修復と、災害から地域や文化遺産を救済し、復興させることにより、高い評価を得た活動実績がある。これらの実績を基礎として、メコン川流域の諸国においてその地域的背景のもとに文化遺産の保存活用学を創成することを目標とする。同地域には、歴史・地理的背景を共有する多くの文化遺産保存事業サイト、そして将来的に世界遺産リスト申請の可能性のあるサイトやそれと同等の歴史的価値を有するサイトと密接かつ多角的な協力のもとに連携した本拠点を中心に国際的な教育研究のネットワークを構築し、高度な専門性と豊かな構想力を持ち、文化遺産の保存を核とした参加・持続型社会の構築を担う人材の育成を行おうとするものである。

【研究交流計画の概要】

共同研究の分野として、以下の 4 つの領域を設定し、各々の目的に即して相手国における主要な文化遺産における課題や問題点について具体的な事例を通じて学際的研究方法を前進させ、文化遺産保存活用学を創成することを目標とする。世界文化遺産の保存活用にかかわる複数の学問分野において、価値評価と保存の基本的な理念を担当する【1. 歴史・文化】領域、技術的支援の【2. 工学・理学】領域、社会制度的な支援の【3. 地域社会・国際関係】領域、そして各領域相互の関係性や複合的課題の研究を推進する【4. クロス・複合】領域。また、海外文化遺産にかかわる地域の独自性については、それに関して実績のある相手国の提携協力大学と共同研究を進める。文化遺産防災安全マニュアルや標準仕様書の考え方等、多角的・複合的課題については、内外の協力機関との間で幅広く学際研究を進め、成果を広く世界に共有・発信するネットワークの構築に努める。

日本・カンボジア・ベトナムにて提携大学と共同主催、運営のサイトセミナーを行うものとする。領域課題の必要に応じて当該国政府、我が国政府機関ともタイアップする。サイト・セミナーは学生の興味の勧誘という意味でも国際的競争の機会であり、実感を介した情報発信の好機であるが、サイト・セミナーをきっかけにした、院生・教員の交換などを通じた協力関係につなげていく。サイト・セミナーの重要な拠点になるのはアンコール・シュメリアップの JSA オフィス、ベトナム・フェの Waseda・HMCC 共同研究所、そしてサンボー・プレイ・クック遺跡の最寄りの都市であるコンボン・トムの早大建築史研究室分室である。日本の研究交流の現場は基本的には今後ユネスコ世界遺産登録に向けた調査と保存準備活動であり、サイト・セミナーは周辺の保存事業現場とする。初年度はカンボジア・ベトナム・ラオス・タイ・ミャンマーの拠点機関と協力体制を築くための協議と今後の事業展開のための予備調査を行う。

[実施体制概念図]

